

令和 4 年 6 月 13 日現在

機関番号：33501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K02232

研究課題名(和文)南島キリスト教伝道圏の形成と福音的信仰の浸潤についての交流史的研究

研究課題名(英文)Cross-regional Historical Study of the Formation of the Nanto Christian Mission and the Infiltration of evangelical Beliefs

研究代表者

一色 哲 (ISSHIKI, AKI)

帝京科学大学・医療科学部・教授

研究者番号：70299056

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：19世紀末に本格化する南島地域へのキリスト教伝道により、カトリックは奄美大島に、プロテスタント諸派は沖縄島に入境し、伝道圏を拡大させていく。その過程で、帝国日本の内国植民地にあるがゆえの抑圧や差別、貧困に喘いでいた南島の民衆の間に「民衆キリスト教」ともいえる福音主義信仰が澎湃として広がり浸潤していった。また、朝鮮半島や台湾の植民地や旧満州、南洋群島等を往還する信徒や伝道者の伝道活動で南島のキリスト教は何度も活性化していた。

沖縄戦とその後の米軍占領期も南島、特に、沖縄島や先島では、戦前の「民衆キリスト教」的福音信仰の浸潤が維持され、いずれも本土のキリスト教受容とはちがった形態が見出された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究が対象とした南島地域では、従来の日本キリスト教史の通説とは違い、士族知識人だけではなく、女性の信徒も活躍をしており、農民層にもキリスト教は浸透していた。このことから、南島地域にも「民衆的キリスト教」といえる信仰の浸潤形態があることを解明した。このような信仰のあり方は、東アジア(朝鮮半島や中国・台湾)のそれに類似していることから、このような浸潤形態は、植民地化等による“苦難からの解放”を切望する民衆的心情に起因するのではないかと考えた。そして、南島地域に浸潤した福音主義信仰は、「キリスト教国」の占領軍に支配された戦後も引き継がれて、南島独自のキリスト教信仰が見られることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：Christian missions on the “South Islands(南島)” began in earnest at the end of the 19th century. The evangelism area expanded in Amami Oshima and Okinawa Island. These islands were dominated by the imperial Japan as domestic colonies. And, the islanders were suffering from oppression, discrimination and poverty. Christian beliefs have brought salvation and healing to those islanders. As a result, evangelical beliefs rooted in the people spread and infiltrated these areas. This form of belief also existed in areas that were once colonized by Japan. Also, Christianity on the “South Islands” was activated by believers and evangelists who traveled to and from those areas. After the war, “South Islands” was occupied by US troops and was military-dominated. Even at that time, the infiltration of evangelical beliefs from before the war was maintained, and part of it was the driving force for the US military to break away from military control and return to mainland Japan.

研究分野：南島・日本キリスト教史 文化交流史

キーワード：キリスト教交流史 「民衆キリスト教」の弧 周辺の伝道知 福音主義信仰 苦難からの解放 受容と浸潤 内国植民地化 南島の軍事化とキリスト教

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

現在、奄美・沖縄・宮古・八重山の各群島をふくむ南島地域には **400** 弱の教会があり、約 **54,000** 人のキリスト教徒がいると思われる。これは当該地域の人口の約 **3.6%** にあたる。日本本土のキリスト教人口が約 **0.8%** であることを考えると、その割合は本土の約 **4.5** 倍にもなる。本土でキリスト教人口の比率が高いのは、東京・横浜、神戸など阪神地域、長崎などで、その地域は、幕末から欧米の先進文明の受容窓口であり、欧米宣教師の日本伝道の拠点となっていた地域である。しかし、近代以降の南島地域は、先進性よりも、むしろ後進性が指摘されており、日本にキリスト教信仰をもたらした欧米流の近代化とは縁遠い地域であると思われる。その南島地域に、キリスト教が広まったのはなぜだろうか。この疑問が、本研究の出発点である。

わたしは、これまでに4度関連の研究分野で科学研究費助成金を受けている。それらの研究により、南島のキリスト教は本土のキリスト教と比較して、受容形態や受容層に特徴があることがわかった。それらの特徴は、戦前、帝国日本の植民地であったり、勢力圏であったりした東アジアの諸地域のキリスト教受容と近似性があることもわかった。

南島や旧植民地等は、近代以降、帝国日本の膨張にともなって、経済的な支配を受け、政治的にも抑圧されていた地域である。また、日本との関係で、南島の住民は、居住地だけではなく、本土や植民地・勢力圏、あるいは、移民先の日系人社会のなかで差別的な扱いを受けることも多かった。

日本本土では、欧米の先進的な文明や政治・経済のしくみを積極的に採り入れるために、主に佐幕藩の士族知識人(男性)がキリスト教の宣教師に接近し、「文明の宗教」としてキリスト教の福音信仰を受け入れたというのが日本キリスト教史の通説になっている。しかし、南島や旧植民地等のキリスト教徒は、それとは、全く違った動機でキリスト教信仰を受容した。つまり、南島の住民は、自らがおかれた経済的苦境と政治的抑圧や激しい差別体験からの救済を願って、キリスト教の福音信仰を受容したのだ。そのため、本土とは違った福音の理解や信仰が表明(告白)された。このことにより、南島地域では日本本土とはちがった独自の信仰形態が見られるようになったのではないかという仮説を立てるに到った。

また、南島のキリスト教伝道・布教の過程を詳細にたどると、旧植民地と南島を往還する信徒・伝道者、南島から植民地や南洋群島、ハワイ、米国西海岸に越境するキリスト者の動きが確認された。このことから、南島では国家の辺境や社会周縁にある人々が「ニライカナイ」の如き未知の地域から幾度となく到来したキリスト教にその都度揺り動かされながら、信仰的に奮い起こされ、キリスト教信仰が苦境にある民衆に救いを与えたことが推察された。

そのため、それぞれの時代に辺境的周縁的地域におかれていたり、社会的底辺におかれていたりしている人々には共通の苦難や悲哀があり、そのことが国家の枠を越えて共通の信仰的心情を育んできたのではないか。

上記のことがらを立証したいということが、本研究をはじめた動機である。

2. 研究の目的

本研究では、これまでの研究成果を生かして、近代以降の南島のキリスト教について伝播と受容の歴史について、総括的な研究を行うことを目的とした。具体的には、以下の通りである。

(1) 歴史的苦難からの解放とキリスト教信仰の浸潤の関係の解明

南島地域は行政的には鹿児島県と沖縄県に属しており、近代以降は内国植民地として経済的収奪や政治的抑圧にさらされ、**1930** 年代後半から対米戦争に備えて軍事化が進むことにより、キリスト教は激しい弾圧を受け、太平洋戦争末期には沖縄島などで激しい地上戦が闘われた。戦後は、奄美群島に関しては **1953** 年 **12** 月 **25** 日まで、沖縄群島以南は **1972** 年 **5** 月 **15** 日まで米軍の占領下におかれた。以上のような日本本土とは全く違う歴史的体験が、キリスト教の伝播や受容にどのような影響を与えたのかを文献等の調査により、実証的に研究することが本研究の第一の目的である。

(2) 越境と交流の視点からのキリスト教史の構築

また、近代以降の南島キリスト教史について、すべての地域について、**19** 世紀後半から **20** 世紀、つまり、近代以降、戦後にかけての通時的研究はほとんどない。しかし、この時代の南島キリスト教史を、日本本土や、朝鮮半島・台湾等の植民地と、南島の人々が移民・植民をした旧満州、南洋群島、ハワイ・米国本土とのキリスト教信仰を通じた交流の歴史として俯瞰したとき、沖縄戦を挟んだ戦前と戦後における信仰的特徴の連続性や、帝国日本の周縁地域として先に挙げたキリスト教交流圏のキリスト教信仰との共時性・同質性を見出していくこと。これが、本研究の二つ目の目的である。

3. 研究の方法

(1) 南島キリスト教史研究の方法論としての「キリスト教交流史」

本研究では、まず、分析の枠組として「キリスト教交流史」という視点をを用いた。これは、行政区画や政治的国境を越えてキリスト教の伝道や信徒・伝道者との交流とつながりを越境的視点で見えていくという考え方である。

本研究の対象地域は、先述の通り行政的には沖縄・鹿児島の2県にまたがっている。また、近

代以降、日本の辺境・周縁地域として位置づけられてきたが、そのことで他国・他地域の辺境・周縁地域との人的交流が経済活動や労働力移動の形で活発に行われるきっかけにもなった。そして、キリスト教の伝道・宣教もこのような人口移動にそって行われてきたといえる。その結果、南島地域では、戦前、本土のキリスト教から自律した独自の伝道圏が形成され、戦後も、米軍の占領下では本土と切り離され、米国と直接結びつくような伝道圏が形成されてきた。

このような地域の戦前・戦中・前後のキリスト教を包括的に理解するためには、「地域」「越境」「学際」をキーワードとした「キリスト教交流史」の視点が有効である。つまり、本研究では「地域」におけるカトリック・プロテスタント諸教派の“交流”や、キリスト者と非キリスト者、教会と諸団体・政党などの“交流”の実態に注視した。また、南島地域に出入りする信徒・伝道者の流れを、「還流」「貫流」「越流」の3つの流れで評価した。これは、県境・国境を「越境」する者の動態を把握するためであった。そして、これらのことがらを証明するために、歴史学やキリスト教だけでなく、社会学や政治学など周辺諸科学の成果を「学際」的に活用しながら研究を進める方法をとった。

(2) フィールドワークと文献調査

また、本研究は、フィールドワークを重視している。文献調査では、公共の沖縄県立図書館や沖縄県公文書館などの他、これまで発表されていない個人所蔵の史料などを探索し、同時にそれらの保存や公開の助言を行った。また、戦前・戦中・前後に南島地域で発刊された地域紙や雑誌などの逐次刊行物にできるだけ目を通し、地域で認識されていたキリスト教会や信徒・伝道者の動向を丁寧に追った。また、非キリスト者や団体のキリスト教会に対する認識を紙上で負っていくことは、当が地域でのキリスト教伝道の実態を把握する上で有効であった。特に、戦前・戦中のキリスト教に対する迫害・弾圧の実態や、占領下におけるキリスト教信仰を利用した宣撫工作は教会内の史料だけではなく、行政や統治者側の史料、そして、新聞の記事による分析が欠かせないと考えている。

4. 研究成果

本研究の成果は、以下の通りである。

(1) 南島キリスト教伝道圏の形成と福音主義信仰の浸潤

報告者は、これまでの研究で「民衆キリスト教の弧」や「周縁的伝道知」の用語を用いて南島キリスト教の特徴を考察してきた。その過程で、戦前、南島地域にやってきた本土出身の伝道者や信徒、外国人宣教師、南島でキリスト教信仰を受け入れた人々や南島から出郷してキリスト教に出会った人々、南島の外からキリスト教信仰を携えて帰郷した人々など、南島キリスト教をめぐる錯綜した人流について、「還流」「貫流」「越流」の3つの潮流に整理をしてきた。

そして、奄美におけるカトリックや喜界島のプロテスタント教会(日本基督教会(以下、旧日基)とホーリネス教会)、徳之島・龜津のメソジスト教会、沖縄島の旧日基、メソジスト、バプテスト教会、石垣島の旧日基教会などの調査を行い、それぞれの地域における教会設立の端緒や教会設立後の伝道・宣教と教勢の拡大について分析を行った。それによると、本土から来島した日本人伝道者や外国人宣教師の感化により信仰を得た例のほか、旧植民地などで信仰を得た信徒・伝道者の帰郷により教会が建てられた例が見られた。

当時、沖縄人たちは、旧植民地や南洋群島などでは、現地の人々に対しては優越的な地位を与えられていたが、日本本土出身者からは差別的な扱いを受けてきた。その結果、本土出身者から同様に抑圧や差別を受けてきた現地の人々に対して、沖縄人たちのなかには、キリスト教信仰を通して、その苦難や悲哀に共感しながら、自身の信仰を深めていくようなキリスト者が出現した。そして、それらのキリスト者が帰郷し、それぞれの出身地で教会を建て、周囲の人々に対して福音を宣べ伝えた事例がいくつも見られた。こうして形成された「周縁的伝道知」は、「民衆キリスト教の弧」を形成し、それぞれの地で福音主義信仰が浸潤していくきっかけになっていった。

その後、これらの人々が信仰を持ち帰った島々の各所で数10人単位の集団洗礼とみられる現象が起きた。また、沖縄島の読谷村のようにリヴァイヴァルが起こった地域もある。このようにして信仰を獲得した人々には、近代的なものへの憧れよりも、自らが置かれている苦境からの救済を切実に待ち望む信仰のあり方がみられた。

このような自らの差別や抑圧の体験を信仰の力に変え、各人が真摯に救済にむけて自らの信仰を深めていくことにより、南島地域には福音主義信仰が浸潤していった。そして、その信仰は1930年代にはじまった南島の軍事化と沖縄戦などを経てもたえることなく、異民族による軍事支配下の戦後に引き継がれていった。

(2) 米軍占領下における福音主義信仰の継承

1945年の沖縄では、5月の時点で民間人捕虜収容所においてキリスト教の礼拝が行われており、6月には米軍のチャプレン(従軍牧師)による洗礼式を行われていた。一方で、沖縄戦終了時に沖縄で生き残っていた伝道者は3名に過ぎず、そのうち、石垣島の新垣信一牧師は同年8月末にマラリアに罹患し、なくなっている。また、奄美では、1930年代に外国人牧師が排斥され、その後キリスト教に対する官民一体となった迫害で、奄美大島のカトリックと喜界島のプロテスタントの教会は、活動停止に追い込まれていた。そして、戦後は、伝道者を欠いたまま教会の

活動が再開されていた。

戦後の南島のキリスト教はこのようにしてはじまった。当時、南島は米軍の占領下に置かれており、教会はチャプレンとともに戦後復興の先頭に立ち、沖縄民政府による「新沖縄建設運動」に積極的に関与した。ところが、1940年代末になり、中華人民共和国の成立や朝鮮戦争の勃発により、東アジアの政治情勢における沖縄の米占領軍の位置づけが米国内外で変化するとともに、上記のような占領軍と沖縄のキリスト教の関係も変化した。

1950年代に入ると、単一教派としての沖縄キリスト教会が設立されたが、米軍との関係もあり、沖縄キリスト教会からバプテスト派が離脱し、新たに沖縄バプテスト連盟が設立された。また、沖縄キリスト教会でも、その前身の沖縄キリスト聯盟の時代から、占領軍との良好な関係を保ち、そこからさまざまな資源を引き出して、教会や地域社会の復興のために利用しようとしたグループと、占領軍についての距離を保ち、沖縄教会の経済的・信仰的自立をめざすグループによる対立が表面化していた。

このうち、後者は、その人的な共通性から、戦前からの福音主義的信仰を引き継いだグループであるといえる。そのグループで代表的な人物であった仲里朝章は、後述の通り、多くの文書を残している。それによると、さまざまな場で米国のキリスト教徒の思想や行動に言及し、それらを評価しつつ、沖縄にいる米国人である占領軍の行動を暗に批判するような手法をとりながら、戦後のキリスト教ブームで新たに教会に出入りしはじめた求道者や信徒に福音を伝えた。

このような仲里の思想は、1957年の沖縄キリスト教学院の設立の際の「沖縄を国際的平和の島に」との宣言に集約されている。この仲里の意志は、平良修や大城実、山里勝一、神山繁實等次の世代の牧師にも受け継がれた。そして、1960年代半ばになると、占領軍によるさまざまな誘惑や圧迫、脅迫などにもかかわらず、沖縄の市民とともに反基地・本土復帰闘争に参加する伝道者や信徒が現れる。そして、占領軍に批判的で、戦前からの福音主義の系譜にある伝道者は、本土の日本基督教団との「合同」へと向かっていく。

そして、1969年に本土教団と沖縄キリスト教団との「合同」が成立する。しかし、「合同」後、1970年代の終わり頃から沖縄と本土の教会の「合同」の内実についての議論（「合同のとらえ直し」）が始まり、現在では、教団の沖縄教区は教団と距離を置いている。

（3）占領下沖縄のキリスト教史関係史料の発掘と保存

これまでの南島キリスト教史研究の取り組みのなかで、報告者は当事者たちの手記などの一次史料の発見に注力してきた。その過程で、戦後宮古教会の創設に尽力した國仲寛一や戦後糸満教会を牧会し、後に沖縄バプテスト連盟に移った与那城勇、そして、戦後沖縄諮詢会委員長・沖縄民政府初代知事を歴任した志喜屋孝信（無教会の信仰をもつ）らが残した文書を所蔵者の許可を得て閲覧し、分析研究してきた。

また、戦後首里教会の牧師や沖縄キリスト教会理事長、沖縄キリスト教学院初代学長の職にあった仲里朝章に関連する文書も可能な限り収集に努めた。仲里は、1916年に上京し、1939年に帰郷するまで23年間東京に在住した。その間、日本基督教団富士見町教会に所蔵されている史料によると、1921年11月27日、植村正久から受洗し、以後、教会学校教師・校長や教会役員・信徒伝道者である長老として活躍したことがわかった。ご家族の証言によると、仲里はこの間に沖縄に関する研究を続けており、関連史料を収集し、多数の論考を執筆したが、それらは沖縄戦により灰燼に帰したという。

そして、仲里は沖縄戦を経験し、戦後、伝道者として活動することになるが、その過程で360点余りの文書を残している。それらの文書群は、家族から沖縄キリスト教学院に寄贈され、「仲里朝章史料」として、2020年4月1日より、公開・閲覧できるようになった（参照：https://www.ocjc.ac.jp/ocpi/ocpi_nakazatotyoushou/）。報告者は、その「仲里朝章史料」の解題として「仲里朝章史料解題、および、仲里朝章関係史料の紹介」を執筆した。

（4）南島キリスト教史の包括的理解と研究の総括

南島地域、とくに、沖縄では、現在も日本における米軍基地の大半が集中しており、そこから派生するさまざまな事件や問題に、地域の住民は直面している。加えて、近年高まりつつある南島周辺の政治的・軍事的緊張にともなって、奄美や宮古、石垣、与那国などの島々では自衛隊の基地が新たに建築され、後にキリスト教が弾圧を受けることになる1930年代と同様の状況が生じつつある。

そんななかで、戦後、米占領軍の影響を受けて主に沖縄島で広がっていた「福音派」といわれるキリスト教のなかには、米軍基地のなかの同様の信仰をもった米軍関係者と親密な関係にあるキリスト者も存在している。その一方で、非キリスト者とともに沖縄島北部の辺野古地区での新基地建設反対運動に参加するなど政治的な活動や発言を続けるキリスト者もいる。また、南島独特の社会問題に取り組む人々のなかにもキリスト者が見られる。

そのような現実のなかで、南島地域の住民たちはキリスト教に対して一定の信頼感と期待を常に懐いている。それは、近代以降、民衆の間に澎湃として広がり、浸潤していった福音主義信仰のひとつの成果といえるのではないか。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 一色哲 | 4. 巻 2022年春号 |
| 2. 論文標題 戦後沖縄史のなかのキリスト教 | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 教育学術新聞 | 6. 最初と最後の頁 7 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 一色哲 | 4. 巻 72(9) |
| 2. 論文標題 戦後沖縄における軍事占領とキリスト教の二つの潮流 戦前からの連続性と沖縄キリスト教史の構造 | 5. 発行年 2017年 |
| 3. 雑誌名 福音と世界 | 6. 最初と最後の頁 12-18 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

| |
|---|
| 1. 発表者名 一色 哲 |
| 2. 発表標題 沖縄・宮古・八重山における米軍による軍事占領と教会 1940年代後半における地域社会とキリスト教 |
| 3. 学会等名 沖縄キリスト教平和総合研究所連続講座 ・第2回 |
| 4. 発表年 2018年 |

〔図書〕 計3件

| | |
|----------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 島園 進、末木 文美土、大谷 栄一、西村 明 | 4. 発行年 2020年 |
| 2. 出版社 春秋社 | 5. 総ページ数 288 |
| 3. 書名 近代日本宗教史 第三巻 教養と生命 | |

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 一色哲 | 4. 発行年 2018年 |
| 2. 出版社 新教出版社 | 5. 総ページ数 232 |
| 3. 書名 南島キリスト教史入門 奄美・沖縄・宮古・八重山の近代と福音主義信仰の交流と越境 | |

| | |
|---------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 大谷 栄一、菊地 暁、永岡 崇 | 4. 発行年 2018年 |
| 2. 出版社 慶應義塾大学出版会 | 5. 総ページ数 450 |
| 3. 書名 日本宗教史のキーワード | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|---------------------------|-----------------------|----|
|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|